

特定非営利活動法人サロン 2002
◀2016年2月月例会報告▶

「このくにのサッカー」を語る
賀川 浩 (スポーツライター)

【日時】2016年2月1日(月) 19:00~20:30

【会場】フットボールサロン 4-4-2 (東京都墨田区江東橋 4-16-5)

【演者】賀川浩 (スポーツライター)

【参加者(会員・メンバー) 17名】阿部博一(日本サッカー史研究会)、安藤裕一(GMSS ヒューマンラボ)、牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会)、梅本嗣(会社員)、奥崎覚(Qoly)、奥山純一(フットリンク Webエンジニア)、春日大樹(筑波大学大学院)、金子正彦(会社員)、小池靖(サッカースポーツ少年団)、嶋崎雅規(国際武道大学)、竹中茂雄(FC品川)、田村修一(フリージャーナリスト)、徳田仁((株)セリエ)、中塚義実(筑波大学附属高校)、本多克己(神戸アスリートタウンクラブ)、宮原陽介(アップルシード・エンジェンシー)、吉原尊男

【参加者(非会員) 8人】石井伸介(苦楽堂)、奥山祐次(会社員)、北原由、川島德基((株)RIGHT STUFF)、熊谷健志(会社員)、小宮山友久、済木崇(会社員)、皆川宥子

【報告書作成者】春日大樹

注)参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません(ご本人の了解が得られた方のみ公開しています)

<目次>

対談集「このくにのサッカー」とは

| | | |
|----------|--------------------|---|
| 本編 1 | ～「このくにのサッカー」執筆動機～ | 2 |
| 本編 2 | ～図書館という文化～ | 3 |
| 本編 3 | ～オリンピック予選を終えて～ | 3 |
| 本編 4 | ～日韓戦の歴史～ | 3 |
| 本編 5 | ～U-23 代表選手の特徴～ | 4 |
| 本編 6 | ～スピードスターからみる日本の成長～ | 5 |
| 終わりに | ～日本のスポーツとサッカー～ | 5 |
| 報告書作成者より | | 5 |

対談集「このくにのサッカー」とは

書籍、ウェブサイトでの対談集製作にあたり、資金調達のために、クラウドファンディングを利用。2015年12月に支援募集を開始し、2016年2月に目標額の350万円を達成した。現在予定されている対談者は以下の通り。

岡野俊一郎・釜本邦茂・セルジオ越後・岡田武史・加茂建・石井幹子・川淵三郎・佐々木則夫・岸本健・澤穂希・櫻井嘉人（対談順）

・ウェブサイト <http://www.konokuni.soccer/>

・書籍は2016年中に苦楽堂から出版予定。

賀川浩氏あいさつ

（2015年12月クラウドファンディング募集開始時）

1873年、英国海軍のダグラス少佐によってフットボールが日本に伝わって以来、140余年を経て、日本サッカーはアジアのサッカー強国となり、FIFA加盟209か国の中でも国内試合の運営や、ワールドカップをはじめとする国際大会の成功などで高い評価を受けています。そうした今日の日本サッカーを築くために力を盡してきた先人たちについて、私は月刊グラウンドで「このくにとサッカー」という連載で2000年6月号から書き続けていますが、新しく「このくにのサッカー」という日本と世界のサッカーの現在と未来を語る対談を企画しました。プレーヤー、監督、サッカークラブの経営者あるいはJFA（日本サッカー協会）の運営にかかわる人たち、メディア関係者、サッカー関連の企業の皆さんなどのさまざまな体験や見識を聞かせていただき、話し合いたい。サッカーの楽しさ、時には苦しさも語りつつ、いまを知り、未来を眺めたいと考えています。

本編1 ～「このくにのサッカー」執筆動機～

日本のサッカーについて自分が一所懸命やって来た彼らが、果たして満足なのか、これからどうしたいのか、そういうことを少しやってみたいと思った。

日本のサッカーの今日を築いてきた人達について、2000年から連載を続けており、70数名の方について取り上げて来た。（※）この中には日本サッカー協会の殿堂入りを果たしている人もいる。この連載は、基本的にこちらが勝手気ままにその人達の事を書いてきたが、今回はそれらに対談集という形でまとめようと思った。彼ら自身の事を書くこともいいが、今の日本のサッカーのために一所懸命やって来た彼らが、果たして今満足しているのか、あるいはこれからどういう風にしたいのか、そういった話を聞いてみたいと思った。これが、今回対談集を書かなければならないと思ったきっかけである。

対談集になるため、自分が勝手気ままに書く訳にはいかず、実際に会って話した事を書かなければならない。それには、お金もかかってしまうので、クラウドファンディングという形を取ることにした。私が会うとなると、まず古い人になる。また釜本邦茂か、岡野俊一郎か、となるかもしれないが、彼らも70歳を超えている。彼らは私より若い、どちらが先に逝くか分からないのでやっておこうとなった。もう一度ゆっくり話を聞くと、また面白い話も出て来る。面白い対談集になればいいと思っている。

※月刊グラウンド連載の「このくにとサッカー」

本編2 ～図書館という文化～

本を媒体にして、サッカー、スポーツが（図書館に）食い込むことは悪いことではない

神戸市立中央図書館に神戸賀川サッカー文庫を置かせてもらっている。現在 6000 冊がここには置かれていて、寄贈されたものも含め、毎年数を増やしている。2、3年のうちに1万冊を超えるかもしれない。

図書館を内側からみると、贅沢な建物であると思う。1日に何千人の人が来る訳ではないが、何千万冊という本を置いて、静かな雰囲気の中で読書が出来るようになっている。このような場所とお金をかけている図書館をみると、これが人間の文化であると思う。その中に、本を媒体にしてサッカー、スポーツが食い込むことは悪いことではない。スポーツ図書あるいはサッカー図書をJリーグのチームとタイアップして、図書館内にコーナーを設けているところが、全国に10何か所もある。サッカー人気は、今回のように（※）勝てば盛り上がるが、負ければ停滞する事もある。それでもここまでサッカーが発展したのは、先人達が地道に各方面へ努力を続けた結果である。その中で、この様に図書館に食い込むのは一つの手であると考えてる。

現在、クラマーを記念して、日独サッカー交流展を日本サッカー協会のミュージアムで実施している。これを4月に、神戸の図書館へ持ってきて、同様に実施する予定だ。サッカーを盛んにするため、サッカーの底上げのために、様々な手を打っているところである。

※この講演は1月30日のリオ五輪最終予選決勝（3-2で韓国に逆転勝利）の2日後に行われた。

本編3 ～オリンピック予選を終えて～

まずは皆さん、おめでとうございます。負けてたら今日あんまり楽しくないですね(笑)

（1月30日の日韓戦勝利を受けて）皆さん、おめでとうございます。自分に得点が入るのか、あるいは相手に入るのかによって、ここまで気持ちがかわってしまうとは、スポーツはおかしなものだと思う。試合後に、負けた韓国の選手がうなだれているのを見て、サッカーは酷なものだとも思った。今日協会を訪ねると、大仁会長がいたので、おめでとうと伝えると、彼もとても喜んでいて、次期会長も決まっている状況で、自分の任期最後の試合に勝てた事で、とても機嫌がよかった。

協会の入り口には、ものすごい数の花が贈られてきていた。これを買うお金があるならば、子供達のために使って欲しいと私個人は思うのだが、サッカーが勝って花屋が儲かるという形で日本経済が回ることもいいことかとも思う。毎回、勝つたびに沢山の花が贈られてくる事に驚くが、今回は特に多かったように思う。これは、今回の大会がアジア選手権というだけでなく、オリンピック予選を兼ねていたからである。オリンピックとなると、日本人はとても盛り上がる。

本編4 ～日韓戦の変化～

今回はどちらかと言えば、（韓国は）あんまりガンガン来なくて、むしろ日本の方がファウルが多くて、前半はどちらが韓国や、と思った(笑)

昔の日韓戦からみると、以前は日本に負けることはとにかく国として面白くないという機運が韓国国内では強かったが、現在は少し変わって来たように思う。もちろん韓国の世論を見なければいけないが、日本に勝つことが昔ほど国内で重要ではないのかもしれない。

韓国が急に足が動かなくなかった事は不思議であった。韓国の選手も最近はサッカーが上手くて、今までのようにガンガン来なかった。今回の試合では、むしろ日本の選手の方がファウルも多く、前半はどちらが韓国か分からなかった。韓国も日本同様に上手い選手をそろえていたが、体力があって上手い選手がいなかった。

日本は、サウジアラビア、イラン、イラク、そして最後に韓国と、勝ち方はきわどいながらもアジアの強豪国を倒してあがって来たので、アジアで一番ということにケチをつけることは出来ないだろう。よい相手と試合をして勝ち抜いていくことは選手達にとってよい事だ。彼らはこれから所属チームでポジションを取らないといけないし、オリンピック本番はオーバーエイジによって枠も減ってしまう。予選で活躍したからオリンピックに必ず行けると言う訳ではないので、選手達も大変である。

本論5 ～U-23の選手の特徴～

(中島選手について) 抜けないくせによう平気で凶々しく出来るなぁと思うが、やっているうちにだんだん相手が疲れてきてスペースが空くと、そこで点が取れる。

Jリーグで常に試合に出ている選手ばかりでなくても、あれだけのよい試合が出来るということが、今の日本サッカーの厚みである。また、手倉森さんのやる事ひとつひとつが全部当たることがすごかった。色んな意味で日本サッカーの底が大きく、分厚くなったと思う。韓国戦の3点目のシーンで、シュートをブロックしたキャプテンの遠藤が、そのまま前に走り込んできた。守っていた守備的MFがあそこまで上がっていくことに、チームの勢いを感じた。

浅野という足の速いFWがいることを韓国は試合前に知っていたはずなのに、スペースを与えてしまっていた。結果として、彼は日本でやっているより自由に走っていた。今回の後半のように、疲れているところへ足の速い選手が出て来る事はDFにとってとても嫌だったと思う。そういった意味で彼を投入するタイミングも上手く計算され、彼ものびのび出て、2得点を決めて男になったと思う。

U-23の選手は技術的には相当しっかりしているが、必要な時に素早くプレーする事や、体を寄せられながらもプレーする事は、何人かは出来ても全体では得意ではないように感じる。イラン戦で2得点を決めた中島も、いつもドリブルしているが、相手が元気な時は引っかかってしまって絶対に抜けない。しかし、抜けないながらも凶々しくドリブルをしているうちに、相手が疲れてきてスペースが出来、そこで点が取れてしまう。

韓国戦だけをみても、2失点目の際、左サイドで確実に通るか分からない方法でパスをだしてしまい、結果として奪われてしまった。このミスで点を取られたにもかかわらず、その後も同じようなプレーをしていた。この様にチーム全体としては一所懸命やっているが、悪く言えば凶々しく、よく言えばおおらかなところもこのチームのよかったところだと感じる。3-2の勝利と2-2でPK戦勝利では大きな違いがあるので、ここ2週間はみんなも気分がいいと思う。

本編6 ～スピードスターからみる日本の成長～

広島の彼（浅野選手）が去年のシーズンに伸びたのは大きい。

広島の浅野が成長した事はこのチームにとって大きな収穫だった。直接ボールに関わらなくても、彼が入る事で前に行く速さが出てきて、DFが引っ張られてしまう。韓国戦の2点目も、彼がニアに走ったからDFが引っ張られ、後ろの背の高くない矢島選手がフリーになった。彼のヘッドは上手かったが、浅野の速さが生きたシーンだ。ロンドンオリンピックの時は永井という足が速い選手がいた。彼もオリンピック前のシーズンに、相手を前から追い回す守備が目立っていた。その永井が初戦のスペイン戦で、後ろから回す相手を追い込んで、相手を破たんさせ日本が勝利することが出来た。あの大会ではスペインは優勝候補だったが、あの1戦で調子を落としてしまい、反対に日本は勢いが付いて勝ち上がっていった。

あの頃の永井と浅野を比べると、浅野の方が少し大きさもあり、切れ味があり、シュートも上手い。この4年間ですば抜けて足の速い2人を比べても、やはり進歩している。その選手を控えにして、相手の疲れた後半に出せるという点に選手層の厚みを感じた。

終わりに ～日本のスポーツとサッカー～

やっぱりサッカーは面白いなというのは、全く我田引水なんです、私の90歳から91歳になった年の感想であります。

今年の日本はついでに、テニスの錦織やラグビーが活躍し、スキージャンプの女の子（高梨沙羅）も天性のジャンパーであるし、フィギュアスケートにも、またタレントが出て来た。個人種目では、それぞれ天才といえる人達が現れて来た。しかし、トヨタカップを観ると、あのバルセロナの様な非常にレベルの高い集団のサッカーはこんなにも楽しいのだなと感じた。高校サッカーも毎日走りまわってがんばっている姿が見られる。そして、今回のU-23代表チームも同様である。他のスポーツが盛んになって他のスポーツのいいところが観られる訳だが、他のスポーツを観ながらも、やっぱりサッカーは面白いと思う。全く我田引水な事ではあるが、私の90歳から91歳になった年の感想である。

報告者作成者より

春日 （筑波大学大学院）

私が初めて参加したサロン2002の月例会は2014年8月、同じく賀川さんが演者を務められた会でした。その時も同じく報告書の作成を行い、今回もまた賀川さんの講演内容をまとめる大役（と私は思っております）を務める事ができ、光栄です。優しい語り口に時折ちりばめられるジョーク、そして何よりサッカーへの愛情を感じられる講演で、私はいつも賀川さんのように長くサッカーに関わり、そしてサッカーへの愛を持ち続けられる「サッカー人」になりたいと、お話を聞きながらいつも思っています。

私のつたない文章ではありますが、本報告書から賀川さんの講演当日の様子がおわかりいただければ幸いです。簡単ではありますが、結びの挨拶とさせていただきます。

以上・・・続きは延長戦にて